

博士論文の要約／Summary of Doctoral Dissertation

氏 名 河合一樹

Name

学 位 論 文 題 目 本居宣長研究－大和心と正名－

Title

全文を公表できない理由 書籍として公刊するため

Reasons why the full text of my dissertation cannot be disclosed on the Internet

書 名 （ 雑 誌 名 ） 『大和心と正名－本居宣長の学問観と古代観』

Name of magazines/journals

出 版 社 名 法政大学出版局

Name of the publishers

発 行 予 定 日 2022年7月

Estimated date of issues/publications

本論文は、日本近世を代表する学者の一人である本居宣長（1730-1801）の思想について、同時代の「正名」を巡る思想史を踏まえつつ再検討したものである。

江戸時代の儒者たちが日本について論じるとき、その口からはしばしば「正名」という言葉が発せられた。「正名」はもともと『論語』子路篇に由来する言葉であり、儒教の長い歴史の中で孔子の根本思想を示すものとして重視されてきた。しかしながら、近世の日本においてはそこに独特の意味が生じることとなった。「正名」は単に『論語』の注釈などの場面で論じられるだけでなく、日本の歴史を記述し、日本の政治体制を論じ、その他日本における様々な事物・制度の名称の在り方について考える際に言及された。儒者たちは中国と日本とを見比べながら「名」を正さなければならないと主張した。それは中国において成立した学問が、日本という異なった社会に輸入されるに当たって生じた摩擦によって成立した問題圏であったと言ってよいだろう。

ところで、中国のことを意識しながら日本について論じるという営みは儒者だけに固有のものではない。日本の古典を研究し、古の日本の在り方を明らかにしようとした国学者たちも、否定的に捉える場合も多いにせよ、強く中国を意識していた。その為、国学者たちが日本近世の「正名」を巡る問題に関わっていたとしても不思議ではない。実際に、本稿の主役である本居宣長は、決して正面から強調した訳ではないが、確かに「正名」とい

う言葉を口にしてしている。そして、それは宣長の思想において決して小さくはない意義を有しているように思われる。その著作の中に散見される「正名」との関わりを丹念に読み解くならば、宣長と思想史との繋がりが様々な仕方で明らかとなり、また宣長の思想を新たに解釈する方途が開かれることになる。本稿が企図するのは、そのような見通しの下に「正名」をキーワードとして宣長を読み直すことである。「大和心と正名」という本書の題目はそのことを意味している。

そのような問題意識のもとに、本論文は二部構成を採用し、全体を次のように構成した。

緒言

序論

第一部 本居宣長の孔子観と「正名」

序章

第一章 宣長と近世の「正名」論

第二章 孔子はよき人—宣長の孔子観とその周辺

第三章 学者としての孔子

第二部 『古事記伝』における「名」の注釈

序章

第一章 死者の名を呼ぶ—諱の問題

第二章 氏姓と政—古えの社会秩序

第三章 尊び呼ぶ—『姓氏録』序文解釈を起点に

結論

序論では、本論文の目的意識を示すために二つの問いを提出するところから議論を開始した。第一は、宣長が鈴木艮とのやり取りの中で「聖人と人はいへども聖人のたくひならめや孔子はよき人」という聖人を否定しながら孔子のみを肯定する歌を詠んでいるように、儒教を強く否定する宣長が何故孔子のみを肯定するのかという問いである。そして、この孔子への評価には「正名」が関わっていると思われることも示した。第二は、『古事記伝』において宣長が「名」に関して允恭記盟神探湯の段の「ウヂカバネ」に関するこれまであまり注目されてこなかった箇所を参照するように指示していることである。『古事記伝』における「名」を巡る宣長の思索は未だ十分に解明されていない。この二つの問題の複合として宣長の「名」についての思想を明らかにすることが本稿全体の課題である。

しかし、ともに「名」に関わっているといっても、この二つの問いがどのように結びついているのか、また「正名」という言葉が出てこない第二の問いをどうして「正名」との関係で論じようとするのかということに関しては疑問が生じるだろう。その点について序論では、宣長の『古事記伝』における「名」を巡る議論が同時代の「正名」の思想史の具体的な議論を踏まえつつなされたものであったこと、また荻生徂徠の聖人による「名」の

制作といったことへの反論としての側面があることなどに言及し応答した。

さらに、序論の最後に先行研究の整理と本論文の構成の説明を行った。本論文が意識している先行研究は主に①日本近世における「正名」の思想史についての研究と②宣長研究に分けられる。①については一定の研究の蓄積があるものの絶対数が少ないこともあり、未だに不足している点もあると述べた。特に国学者と「正名」の問題はこれまであまり扱われておらず、本論文はそれを補うものになり得るとした。②については、膨大な宣長研究を網羅的に整理することは出来ないものの、近年の動向として『古事記伝』研究が盛んであることを示すとともに、本論文は宣長と儒学という古くからの主題について「正名」という観点を導入することで新たな見解を示し得る可能性があるとして述べた。本論文の構成は先に示した目次の通りであるが、具体的には『玉勝間』第九三条と『古事記伝』允恭記における「名」の注釈という二つの箇所を中心として扱う文章として選び、それぞれ第一部と第二部において取り上げることを述べた。

第一部「本居宣長の孔子観と「正名」」は上記の第一の問いを扱うものである。まず序章では、本部の議論の前提となる「正名」の出典や基礎的情報などを説明するとともに、宣長と「正名」との関係論を論じる上で極めて重要となる『玉勝間』第九三条の内容を概観した。上述のように「正名」は『論語』子路篇に出典があり、その後の儒教の展開の中で孔子の根本思想として捉えられるようになった。特に重要なのは『孟子』などによって「正名」が孔子の『春秋』編纂の理念として位置づけられたことである。そして、『孟子』は孔子の『春秋』編纂を「天子の事」として堯・舜・禹などの功績に並ぶ偉業であるとした。このような見方は春秋三伝や『史記』によってさらに具体的に示されることになった。「聖人と人はいへども聖人のたぐひならめや」という宣長の言葉を理解する為にはこのような背景を踏まえる必要がある。

本論文第一部の中心となる文章である『玉勝間』第九三条では、宣長は同時代の儒者が口では「正名」と言いながら実際には好き勝手に名称を変更し「名」を乱していると批判する。しかし、「正名」ということ自体については肯定的に捉えており、日本の儒者たちの行いは孔子の「正名」にも背くものであるという仕方で議論を展開している。すなわち、宣長は孔子の「正名」を自らの立場を補強するものとして扱っている訳である。

第一部第一章「宣長と近世の「正名」論」は、本論文全体にとって重要となる日本近世の「正名」論の全容を先行研究にも依拠しつつまとめるとともに、宣長と「正名」の思想史との関係を整理したものである。『玉勝間』第九三条のもととなった『彝庵隨筆』の文章を踏まえると、そこで具体的に批判対象となっているのは太宰春台の『經濟録』の一文であることが分かる。しかしながら、『玉勝間』第九三条の思想史的背景は単に春台への批判という側面を考えるだけでは充分ではない。というのも、春台が必ずしも全面的に「正名」ということを強調していないとともに、同時代に『玉勝間』第九三条と類似した「正名」に言及しつつ徂徠派を批判する言説が多く存在しているからである。ここでは一例として猪飼敬所『操觚正名』と村田春海『時文摘緝』を取り上げた。そのため、『玉勝間』第九三条における宣長の発言を理解する為には、直接の批判対象だけではなく同時代

の「正名」を巡る言説を広く踏まえなければならない。

日本近世の「正名」に関する先行研究によって既に寛政期に「正名」論の流行があったこと、政治的な側面が強いものと文辞的な側面が強いものがあったこと、先立つ時期の荻生徂徠や新井白石の言説が寛政期の流行の源流となっていることなどが指摘されてきた。本論文では改めてそれらを確認するとともに、「正名」の思想史の源流に浅見綱斎『称呼弁』や留守希斎『称呼弁正』を加えるべきことを述べた。徂徠およびその門下は「正名」の思想史において度々主な批判対象として登場するにもかかわらず、彼ら自身の著作が直接「正名」の思想史へと与えた影響は限定的であり、日本近世における「正名」の思想史の直接の源流は他に求めなければならない。朝幕関係などの政治的側面の強い「正名」の言説については、新井白石が「国王」号などについて論じたことが後に大きな影響を与えた。それに対して、文辞を中心として「正名」に言及するものは、宝暦年間に刊行された留守希斎の『称呼弁正』が早い時期のまとまった著作であり、さらにその背景には浅見綱斎『称呼弁』がある。また、希斎の『称呼弁正』には強い徂徠派批判の傾向もある。これらの著作と宣長との直接的なつながりは必ずしも明確ではないものの、宣長の青年期にすでに「正名」を巡る言説が存しており、何らかの形で触れていた可能性は充分にあることを示した。

第一部第二章「孔子はよき人—本居宣長の孔子観とその周辺」では、第一に宣長の孔子観についてより詳細に確認するとともに、第二に周辺の思想家たちとの比較を行った。

「孔子はよき人」の歌は宣長の孔子観を端的に示すものではあるが、短い歌から知り得ることは限られている。そのため、孔子観の問題が宣長にとって重要なものであるのかどうか、また宣長が他の箇所においても一貫して同じような態度を示しているかどうかということ等をまずは明らかにしなければならない。その為に、本章では『原玉勝間』と『玉勝間三の巻』初版本および『玉勝間』に散在する孔子や孟子などに関わる記述を扱った。『原玉勝間』から明らかになったのは、当時の宣長に具体的な形で自らの学統を示そうという意図があったということであり、「孔子はよき人」の歌もそれと無関係であるとは考えられない。また、『原玉勝間』と「孔子はよき人」の歌の時期的にも近いことも両者の間の関連を示唆している。このような学統に関する思索との繋がりを想定するならば、宣長の孔子観はその思想において極めて重要な意味を持っているといえることができる。

そして、『玉勝間』三の巻初版本にある記述では「孔子はよき人」の歌を敷衍したような内容が詳細に書かれており、周公旦や孟子を徹底的に否定しながら孔子のみを高く評価する見解が明確に示されている。その際に周公旦こそが悪しき道をつくった張本人であると強く非難されるとともに、孔子はあくまでその道を伝えただけであるという評価が下されていることも重要である。そして、『玉勝間』には他にも孔子に関わる記述が散見されるが、それらの全体を通して宣長の態度は一貫していることを示した。これらのことから、宣長の孔子観は定まった見解であると判断できる。

同時代の思想家との比較として、まずは国学者の中で宣長のような見方が一般的であったのかどうかということ論じた。仮にそれが広く共有されているものだったとしたら、

殊更に宣長の思想の特徴として取り上げるべきものではなくなってしまうからである。賀茂真淵・村田春海・平田篤胤などと比べた結果、これらの人物は皆全て異なった立場を取っており、宣長も含め国学者たちの孔子観は一枚岩ではなかったことが明らかになった。真淵は強烈的な儒教批判を宣長と共有しているものの、儒教と孔子を切り離して孔子だけ高く評価するという態度を示していない。江戸派の代表的人物である村田春海は、そもそも儒教を否定しておらず、むしろ自信を「儒者」とさえ位置づけていた。篤胤は「孔子はよき人」の歌を解釈し宣長の真意を解説しているが、その内容は篤胤の独自性が極めて強いものであり、宣長と同じ立場を取っているとは言い難い。このような国学者の間での孔子観の多様性を踏まえるならば、宣長の思想の問題としてその孔子観を考察することの重要性はますます高まったといえるだろう。また、儒者との関係として、宣長の孔子観には少なくとも徂徠派の影響があることを示した。

第一部第三章「学者としての孔子」では、これまでの議論を踏まえ、第一部の締めくくりとして宣長が何故儒教を否定しながら孔子のみを高く評価したのかということの理由へと話を進めた。本章で最初に行ったのは「もののあはれ」との関係から宣長の孔子への肯定的評価を捉えようとする見方への反論である。本論文でこれまで取り上げて来た資料は主に宣長の晩年のものであったが、孔子への言及自体は青年時代から散見される。そして、京都遊学時代の書簡や『紫文要領』といったものを見ると、宣長が孔子の人格に共感を持っているように見受けられる箇所がある。特に『紫文要領』においては、もし孔子が『源氏物語』を知っていたならば、『詩経』の代わりに六経に加えていただろうという極端な発言までしている。その際宣長は孔子を「もののあはれ」を知る人物として捉えていた訳である。このような記述が宣長が孔子に対して好感を持っている一因であることは否定できないが、これだけでは本論文で見えて来たような「正名」への評価を十分に説明しきることは出来ないと考える。というのも、第一には既に述べたように初期書簡や『紫文要領』と『玉勝間』では大きく時期が異なっているからであり、第二には『紫文要領』において宣長は『源氏物語』を儒仏の書とは異なるものとして捉えており、それを『春秋』や「正名」と関連付けて考えることは困難だからである。

そのことを踏まえ、本論文ではあくまで「正名」や学問観の問題を中心に据えてその孔子観を捉えるべきであると考え。ただし、その際にまだ反証となるようにも見える文章が存在しているので、ここでそれらについて取り上げた。『古事記雑考』や『くずばな』において宣長が孔子の学問を否定しているように感じられる記述があるが、詳細に検討すると儒教全体を否定しながら孔子自身については全面的には否定していないものと考えられる。それは第一部第二章で見たような態度の延長として捉えうるものである。特に、『くずばな』では、『孟子』における春秋編纂を以て孔子を聖人として位置づける文章を宣長は批判している。しかし、『くずばな』の背景なども考慮すると、宣長はそこで孔子の春秋編纂そのものよりも、それを聖人の偉業であるとするに反対しているものと見受けられる。

ここで、聖人の偉業として評価しないのであれば一体どのようにして肯定的に評価する

のかということが改めて問題となる。その際に注目されるのが、『宇比山踏』などで示されている宣長自身の学問観である。そこで宣長は自らの学問で道を明らかにして後世に伝えていくことを「宣長が志」と表現しながら、自らの考えに基づいて強引に行動を起こすことを戒めている。このような態度は、『玉勝間』三の巻初版本で示されていた道を伝えた人物としての孔子という像にも当てはまるように思われる。またこの『宇比山踏』の一文は『徂徠集』における徂徠が自らの志を述べた文章を踏まえていると考えられるため、その点からも孔子へとつながる可能性が補強される。

そして、宣長にとってもう一つの学問の理想が、天武天皇・稗田阿礼・太安万侶による『古事記』の編纂であった。『古事記』序文の解釈を示す『古事記伝』二の巻において、宣長は『古事記』編纂の様子を描き出すとともに、自らの注釈作業をそれと重ね合わせてさえいる。宣長は自らの学統を直接的には契沖や賀茂真淵に連なるものとして描き出すが、古学の理想自体は早くも『古事記』編纂において実現されていた訳である。

宣長は『古事記』編纂について語る際に、特に太安万侶が漢字を用いて日本古代の言葉を記そうとする苦勞に思いを馳せながら、すでに「漢意」に染まった時代の中で古えを伝えようとする営為を評価している。また、『玉勝間』における「漢意」という有名な条では、単に中国に由来するものを尊ぶだけではなく、物事を理屈で考えようとすること自体が「漢意」であると極めて広い定義を示している。そのことは裏を返せば、宣長自身極めて逃れ難い形で「漢意」の中に生きているということの自覚であったと思われる。神代文字を認めない宣長にとって文字は中国から入って来たものであり、さらに書物を編纂し後代へと伝えるということも中国から入って来たものに他ならない。理想である日本古代から離れ、「漢意」に染まった中でこそ学問は行われることになる。

第一部で順を追って見て来たように、宣長は『原玉勝間』において自らの学統を明確にしようとしていた。そして、『玉勝間』三の巻初版本で道を伝えた人物として孔子を捉え、『玉勝間』第九三条や「孔子はよき人」の歌のやりとりなどで「正名」を肯定的に評価していた。それらのことが行き着くのは、宣長は孔子を理想の学者として捉えていたということであり、それは宣長自身の学問をも基礎づけるものであったということである。

第一部が主に「正名」の理念を巡るものであったのに対して、第二部『古事記伝』における「名」の注釈ではその題目の通り宣長が構想した日本古代の「名」の在り方へと踏み込んでいく。第二部序章では『古事記伝』允恭記盟神探湯の段の注釈を確認し、そこにどのような問題があるかということを示した。既に述べた通り、宣長は「名」についてこの箇所を参照するように指示していた。しかし、この箇所の注釈では「名」一般に関わる抽象的な議論よりも「ウヂカバネ」の説明に重きが置かれている。そのため、①「ウヂカバネ」の議論は「名」一般の議論と繋がっているのか、それであるとすれば②何故宣長は「ウヂカバネ」をそれほどまでに重視しているのかといったことが最大の疑問点となる。そして、より具体的には③「ウヂカバネ」がどのように成立したと宣長は考えているのか、④注釈の中に登場する「職業」「諱」といった他の概念は「ウヂカバネ」や「名」とどのような関係があるのかということが問題なる。第二部の各章ではそれらの点について考察

していくことになる。

第二部第一章「死者の名を呼ぶ一諱の問題」では、宣長が日本古代には「諱」が無かったと言っていることにどのような思想的意味があるのかということを論じた。宣長の「諱」に関する発言を大きく取り上げたものとして穂積陳重の『実名敬避俗研究』がある。しかし、穂積はそこであくまで「諱」の有無を問題とする立場から近代の知識をも動員しつつ宣長に対して反論したのであって、その思想的意義を論じることはなかった。結局のところ、何故宣長が「諱」の存在を否定したのかということについては改めて一から考えなければならない。

宣長の「諱」に対する記述の中でまず注目されるのは、『古事記伝』の注釈や『玉勝間』において宣長がそれを明確に「漢意」として位置づけ日本古代の在り方とは正反対のものであるとしていることである。すなわち、宣長は単に事実認識の問題として「諱」がなかったと言っているだけではなく、自身が思い描く日本古代の在り方からすれば「諱」はなかったはずであるという思想的な面からもそれを否定しているのである。

しかし、単に「漢意」であるというだけでは、宣長が一体何を問題視しているのかということが定かではない。そこで本論文では、同時代の思想史を検討し当時「諱」を巡ってどのような言説が存していたのかということの問題とした。第一には、「諱」が「正名」との関りで他の思想家においても一定程度重視されていたことを指摘した。そして、第二に新井白石や村田春海が『孟子』に依拠しつつ、死んだ親のことを思い出して悲しいのでその名前を呼べなくなるという人間の心情から「諱」の制度が生まれたとする見解を示していることを確認した。

それに対して、宣長は『古事記伝』の注釈において人が死んだ際にはその名前を読んで悲しむのが日本古代の在り方であると述べている。そして、さらに宣長の思想の中で極めて重要な「真心」の概念においては、「漢意」に染まった中国では自らの感情を隠そうとするが、日本古代において「真心」を持っていた人々は素直に自らの感情を表出していたという対立が描かれている。それらを踏まえると、宣長は感情を素直に表出しない点で「真心」に反するもの「漢意」として「諱」を否定していたと考えられる。

また、そのような感情の表出として言葉が生じるあり方が、早年の『石上私淑言』などの「もののはれ」論における歌の成立に対する見解とも繋がっていることも指摘した。

第二部第二章「氏姓と政—古えの社会秩序」では、主に何故宣長が「ウヂカバネ」を極めて重要な問題として扱っているのかということを論じた。本章でまず行ったのは、宣長の「ウヂカバネ」を巡る言説が同時代の議論を踏まえたものであったことを示すことである。『玉勝間』に「姓氏」という条があり、そこで宣長は私的に「姓」を改める「修姓」を批判している。そして、その際に国学者たちによる「修姓」を主な批判対象としながら、当たり前のようにそれでは儒者と同じだと言っていることが注目される。「修姓」の問題はもはや宣長にとって暗黙の前提として扱ってよいことだったのである。

具体的な儒者の言説とそれに対する宣長の応答として、第一には「異姓不養」を取り上げた。周知のように、儒教においては先祖祭祀との関係から異姓養子が禁止されていたが、

当時の日本では当たり前に行われていた。そのため、一部の儒者は強く「異姓養子」の害を主張したが、それに対して宣長は『玉勝間』で誰も後を継ぐ者がいなくなるよりは、養子をとった方がいいと反対している。第二には、「同姓不娶」である。太宰春台は『弁道書』において日本古代は無秩序な禽獣と同じ有様であったとして、天皇家にも婚姻のルールがなく近親と結婚していたことに言及している。それに対して宣長は強く反発し、日本古代において異母兄弟との結婚は許されていたが同母兄弟との結婚は禁じられており、婚姻のルールがなかった訳ではないという。また、それ以外にも厳格な決まりがあり、中国とは異なっているものの、むしろより正しいルールが守られていたとする。

この二点がともに日本の風習を批判する儒者に対抗しようとするものであったのに対して、第三の「百王一姓」は多少事情が異なっている。というのも、この言葉は孟子の易姓革命の思想に乗っ取りながら日本における皇統の連続を寿ぐものであるからである。垂加神道などでしばしば用いられたこの言葉を若い頃の宣長も随筆の中に書いている。しかしながら、『古事記伝』の「ウヂカバネ」を巡る注釈においては「百王一姓」という表現が用いられることはない。その背後には「ウヂカバネ」に対する見解の変化があると考えられる。

従来の「姓氏」「ウヂカバネ」を巡る言説に対抗して、宣長が構想したのは「職」「官職」と「ウヂカバネ」との結びつきである。日本古代に明確な「官職」がなかったように見えることから、そこには秩序がなかったと主張する儒者がいた。しかし、それに対して宣長は古代日本では「ウヂカバネ」が「職」と結びついており、代々家の「職業」を受け継いでいく厳格な秩序が存していたのであるとする。そして、「アマツヒツギ」の解釈において宣長は天皇の役割までも「職」として捉える。宣長がこのような中国とは異なった日本独自のものとしての「ウヂカバネ」を構想することによって描いたのは、各々の家の「職」が極めて固定的であり、それ故秩序が維持され続けて来た日本という像である。

第三部第三章「尊び呼ぶ—『姓氏録』序文解釈を起点に」では、日本古代における「名」の成立について宣長がどのように考えていたのかということの問題とした。日本古代における秩序がどのようにして生じたかといえば、宣長はそれは神の道であると答えるだろう。しかしながら、その秩序に対する「名」については事情は異なっている。允恭記の盟神探湯の段においては、「名」は「為」であり、人の名前もその人の「ある状」を「尊び呼ぶ」内に成立すると述べていた。また、「ウヂカバネ」については、朝廷が定めたもので軽々しく扱ってはいけなしながらも、大本を辿れば「おのづから」成立したものであるとしていた。それらの意味を明らかにし、また宣長における「名」の成立全体についても論じるのは本章の課題である。

本章でまず扱ったのは「ウヂカバネ」の成立である。その際に注目されるのは、宣長が「ウヂカバネ」の成立について『新撰姓氏録』序文の記述を否定しているように思われることである。萬多親王によって編纂された『姓氏録』は日本古代の「ウヂカバネ」を整理し纏めた重要な古典であり、宣長が『古事記伝』を書く際にも常にその書齋に置かれていた。『姓氏録』の序文では、『日本書紀』の記述も踏まえながら神武天皇の時代にすでに

「ウヂカバネ」が存在していたと読める箇所がある。そして、実際に谷川士清は『日本書紀通証』の臆言においてそのような見方を示している。しかし、宣長は神武記にある「阿多小椅君」の注釈で、その当時にはまだ「ウヂカバネ」が存在しなかったと述べている。また、その後も明確にどの時点で成立したかということ述べてはいない。

何故宣長がそのような態度を取っているのかということを考える為に、「ウヂカバネ」を離れて「天皇」号について扱った。一般的には初代天皇は神武天皇であるということになるが、宣長は神武天皇の前に五瀬命が天皇であったとする。そして、さらにホノニギなども天皇であるとして何時「天皇」号が成立したのかということも明確にしていない。それが何故かという理由について、宣長の「天皇」号の扱いを見ると、まずヤマトタケルが天皇に準じた存在として扱われることについてその生涯の悲しさにおいて人々にとっては神と感じられるものであったためにそのような扱いになったという。また、神功皇后をどのように扱うかという江戸時代の歴史編纂において大きな問題となっていたことについて、宣長はそのとき誰が天皇であるかと厳密に決定するのは日本古代の在り方ではなく、神功皇后の胎中に後の応神天皇がいたので応神天皇に仕えることと神功皇后に仕えることの境界は曖昧であったとする。そして、ここにおいて重要なのは、その主張をする際に人々が誰を天皇と呼んだかという点に焦点を当てていることである。

「スメラミコト」ということについても見てみると、宣長は「スメラ」を「統ぶ」であるとする真淵の説に反対し、あくまで敬称であるとしている。また、「ミコト」についても敬称であると捉えているため、「スメラミコト」は全体として元来は特定の地位の名称であるよりも最上の敬称であるということになる。すなわち、人々がどのように呼ぶかということが宣長においては重要視されており、それは「天皇」にも「ウヂカバネ」にも共通していると思われる。このようなあり方が「おのづから」とされており、具体的な成立の時点を示さない理由であると考えられる。

そして、このような態度は『古事記雑考』を踏まえると神名についても維持されており、さらには『古事記』全体の語り方としても重視されているように思われる。宣長にとって『古事記』に記された古伝はもともと誰が言い出すこともなく成立したものであり、そのような見方が様々な点において適応されていると考えられる。人々が「尊び呼ぶ」ということが「名」の成立の根幹であるという宣長の主張はこのような形で具体的に示されている。また、このような「名」の成立の過程は聖人による制作を重視する徂徠の立場に対する批判となっていることも指摘した。

結論においては、これまでの二部六章の考察を振り返るとともに、先行研究の中での本書の意義を改めて示し、さらに今後の課題についても言及した。「正名」の思想史を踏まえながら宣長の思想を読み直すという本論文の試みによって、同時代の「正名」を巡る言説と宣長との深い関りが示されたと思う。第一部で見たようにそれは宣長の学問観とも関わっており、第二部で見たように宣長は理想の日本古代の在り方を構想する際に「正名」の思想史を度々参照していた。

日本近世の「正名」の思想史についての先行研究に対する本稿の成果は、なによりも

これまで十分に論じられていなかった宣長について論じることで、国学者たちも含めてこの問題を考える必要があることを示した点にあるだろう。また、第一章の概観は先行研究に依拠した箇所も多いとはいえ、多少は新たな見解を加えたかと思う。宣長研究における本書の位置づけとしては、まず宣長と儒学との関りという古くからの主題に対して新たな可能性を提示できたのではないかと思う。「正名」を論じていた儒者たちと宣長に共通していた中国を意識しつつ日本の事物・制度を論じるという態度は一つの当時の知の在り方として連続したものであったと言ってよいだろう。また、孔子観の問題についても、中国思想を含める形で宣長がその学統を構想したことは、やはり江戸時代において新たな学問を創り出そうとする挑戦に必要なものだったのだろう。第二部の個々の議論は『古事記伝』研究に対しても一定の価値を提供できるものになったのではないかと考える。これまでの研究では『古事記』上巻部分に対する注釈を扱うものが多かったのに対して、本論文では中下巻を中心に扱った。

残された課題や今後の展望については、「正名」の思想史と宣長との交錯点を扱った本論文はその成果をその両者に向けて延長していかなければならないと述べたほか、より具体的な展望として、宣長以降の「ウヂカバネ」を巡る言説が数多く存在していることを指摘し、細井貞雄の著作などにも触れながらそれらについての研究の可能性を述べた。